

中華人民共和国成立初期の梁漱溟 ——「尚賢尊師」と「階級闘争」の相克——

千葉 勇輝

I. はじめに

革命なるものを経て成立した中華民国は共和制による統治を実現すべく憲法や議会制度を整え選挙も行ってきたが、「軍閥」を中心として省単位での権力集中が進み、中央政府の国家を統御する力は次第に弱まっていった。安定した国家の建設が難航する事態に当時の知識人たちの焦りは募り、近代的な統治システムや政治制度を模索するだけでなく、裏返しとして中国の伝統に対する多様な考察と実践も生まれた。こうした知識人たちの思考には「伝統」と「近代」、「特殊」と「普遍」といった二分法では割り切れない複雑に入り組んだ思想が存在していた。主に1930年代の郷村建設運動の担い手として知られ、後には新儒家の第一世代としても位置付けられる思想家の梁漱溟(1893-1988)もまた、「伝統」と「近代」の間で揺れ動く存在だった。本稿では、20世紀中国の時代的複雑性を解きほぐす試みの1つとして、梁漱溟を取り上げ、特に中華人民共和国成立初期(以下、当時の史料用語としても使われていた建国と記す⁽¹⁾)の思想営為を明らかにすべく、該当時期の彼の論稿を分析しようとするものである。従来は、共産党に対して明確な賛否の立場を示した存在としての梁漱溟像が論じられてきたが、研究史上の空白とも言える建国初期に焦点を当てることで、中国の「伝統」に基づいた改革を信じた一人の思想家が、「伝統」の否定を通じた一つの「近代」の実践に触れた時に生じた揺れ動きをそのままの姿として描くことを試みるものである。

人(あるいは国家)が自らの思想を語る時、得てしてそのように考える自分でありたいという理想の自己像が一部投影されることがあり、実際に表現される思想に明確な対立が見られる時にも、そうした理想の自己像の投影によって対立が極端化している可能性も踏まえた議論が必要だと筆者は考えている。なぜなら、対立を指摘することが容易な現代社会においては、そうした対立の背景を冷静に見つめる我々の姿勢が、異なる考え方を持つ人々の共感基盤の形成にとって大切だと考えるからだ。そのような身の丈に合わぬ問題意識を抱え、混沌の20世紀前半の中国において明確なスタンスを取ったとされる一人の思想家に焦点を当てるのが、遠く現代につながる普遍の問題へのアプローチとなると信じて分析を行う。特に建国初期における梁漱溟と毛沢東という2人の、明らかに対立したとされる思想を、中国の特殊性を主張する梁の側における迷いの部分から分析することは、確固として見えるその対立を再考するのに役立つと考える。

1. 梁漱溟の経歴

1893年、梁漱溟は毛沢東と同じ年に北京に生まれた。学生時代から西洋の政治制度や哲学を積極的に学んだ後、自らの生活に対する苦悩から仏教に救いを求め、1917年には25歳の若さで中学卒の学歴ながら北京大学でインド哲学を講じた。1920年以後は、孔子崇拜へと転じ儒家として活動をはじめ、1924年に北京大学を退職してからは自らの理念に基づいた実践的活動へと軸を移す。1930年代を通じて「郷村建設運動」を進めるが思うような成果を得られぬまま、日中戦争が勃発すると活動を中止し、「抗戦」のため共産党と国民党の調整に邁進する。1941年には両党のどちらにも属さぬ「民主党派」をまとめ、章乃器（1887-1977）、張君勱（1887-1969）らと中国民主政団同盟（1944年には中国民主同盟へ改称）⁽²⁾を設立した。終戦前後から次第に共産党へ接近し、中華人民共和国成立後には、毛沢東と幾度か会談し、1951年には四川の土地改革に参加した。しかし、梁の煮え切らない態度や共産党への批判に対し、毛は1953年に梁漱溟批判を展開、1956年に梁は自己批判の文章を公表する。その後も中国文化に関する執筆は続け1988年に逝去（94歳）する。

2. 先行研究

多種多様な梁の経歴ゆえに、彼に関する先行研究も、儒家や仏教徒としての彼の思想を扱う哲学史的研究から、1930年代の郷村建設運動の思想や実態を分析するものまで多岐にわたる。彼の評価は、小野川（1948）やアリトー（Alitto 1979）、鄭（1999）らに見られるように、近代化への反発という意味で、「伝統保守主義」や「文化保守主義」などと区分されてきた経緯がある。梁の代表作である『東西文化及其哲学』（1921）や『郷村建設理論』（1936）などの分析、郷村建設運動の実態を探る研究など多くが取り組まれてきたが、建国初期の梁漱溟思想を正面から取り上げるものは少ない。

河田（1989）と砂山（2014, 313-314）は、毛沢東の思想との比較の観点から、建国初期の梁の立場について同様の見解を示している。すなわち、梁は基本的に毛と違う路線を志向し続け、中国社会には「階級」がないという認識を変えなかったにもかかわらず、「新中国」建設のための「階級闘争」や「武装闘争」が有効だと一部認めたのは、当時の思想状況（後述）の中で已むを得ない選択であり、本心ではなかったと理解するものである。それに対して溝口（1996）は、正反対の立場に立ち、梁の路線を「もう一つの「五・四」」として位置づけられると主張する。つまり、基本的には陳独秀・李大釗らと同一の路線上に並びながらも対立しあった梁の「もう一つ」の路線は、やがて陳・李の「五・四」を引き継ぐ毛沢東の「新中国」建設の道と合流するに至るとするものである。こうした理解は、梁と毛の路線の合流を前提とし、建国初期の梁の「思想改造」及び共産党による指導の受け入れを示す表現をそのまま受け取る解釈に基づいている。

3. 研究課題

このように建国初期の梁漱溟については、毛沢東との論争という観点からの研究が中心であり、毛や共産党に対する微妙な距離の取り方については見解が分かれている状況である。そこで本稿では建国初期の梁漱溟、とりわけ研究がほとんど見受けられない共産党の「大衆動員」に対しての彼の認識を分析していく。後に詳しく述べるが、梁は、華北・東北地域の工業建設の視察（1950年）、四川での土地改革への参加（1951年）を通じて共産党の大衆動員に触れたと言える。そこには中華人民共和国成立後、共産党の統治が固まってく中で政治的制約を認識しながらも、梁の思想を十分に反映させた語りが存在していた。本稿では、共産党の大衆動員に対する肯定・否定だけでなく、その語り方に着目することで、より梁の思想を明らかにできるだろうとの前提に立ち、分析を行う。

II. 梁漱溟の中国社会観

1. 中国社会に関する梁漱溟の認識

本節では主に梁漱溟の『鄉村建設理論』を参照する。溝口雄三は、梁の『鄉村建設理論』の支柱が、中国が西洋から学び取るものとしての科学技術と団体組織にあると説明した。科学技術とは農業生産力の向上のために必要とされる技術であるが、『鄉村建設理論』の主要課題は、中国の伝統精神を主体としつつも西洋の長所が取り入れられた団体組織をいかに農村に構築するかという点にある、として整理されている（溝口 1996, 64）。中国は列強の進出から国際競争に引き込まれてもなお散漫な社会でありつづけ、正常な競争市場も整わなかった（梁 1936, 638-639）。したがって梁は、団体の組織化を鄉村建設の核に据えたのだった。

また、西洋近代社会と中国旧社会を区別したうえで対比させ、前者を個人本位、階級対立社会と呼び、後者を倫理本位、職業分立社会と表現した。西洋近代社会は、集団生活に強く規定されてきた反発から個人の権利意識を出発点とする個人本位の社会であるが、中国旧社会は、集団生活の欠如から個人と集団の間に緊張関係が見られず、家庭関係に擬して人間関係を捉える倫理本位の社会であるとした（梁 1937, 166-168）。さらに、西洋近代社会は、商工業発展のもと生産手段の寡占が進み、資本家と労働者の間で搾取—被搾取関係が形成された階級対立社会であるのに対し、中国旧社会ではこのようにはならず、土地の自由売買、遺産の均分相続、科挙試験などを挙げて、貧富はあっても変動が大きく、職業間の流動性も高い職業分立社会であるとしている（梁 1937, 170-172）。

そして、階級が欠如した中国では統治階級が存在せず、孤立無援な唯一の統治者である皇帝は民衆との対立を避け（梁 1930, 91）、武力による国家統治ではなく、「教化」によって民衆の「礼俗」を養い、倫理関係を維持することで社会秩序を支えてきたとしている（梁 1937, 179）。ここで、「礼俗」を秩序形成の核としたとき、「自力」を求め、「内に向かって

力を尽くす」という性格が中国文化の底流にあると論じており、この点については、『東西文化及其哲学』に詳しいのでそちらを参照されたい。『郷村建設理論』の文脈に即せば次のようになる。倫理本位社会では、己に原因を求め反省の姿勢によって対人関係を円滑に進め、職業分立社会では、階級対立の社会とは違って機会は平等で、運命は自身にある。よって外に求めるのではなく内に向かって力を尽くすしかない（梁 1937, 179-180）。

こうした中国文化の特色は突き詰めれば「理性」の発露にあると言う。梁は、心を平静に保ち他人との意思疎通を円滑にするための、この理性が、中国社会に発達した理由を孔子に求める。孔子は独断的な基準を押し付けることなく、己に対する反省、得失の概念を超えた義理、善悪の判断を自らの内側から発することを求め、人の理性を信じ、啓発してきたと主張する。理性は礼俗の実践を通じて秩序維持の基盤となってきたが、その重要な責務を担う「士人」が尊ばれる対象たり得たことも、理性を代表するという文脈においてであった。中国は君主統治であったが、理性を備えた代表である士人が君主と庶民の両方に「教化」の責務を負うことで、両者の緩衝材的な役割を果たしてきた、という考察である（梁 1937, 181-182, 185-187）。

2. 中国新社会の建設

梁は、中国社会を立て直す方途として中国精神と西洋の長所の融合を掲げるが、詰まるどころそれは中国の伝統精神を核とした「組織化」だった³⁾。しかし梁は次の問題を提起する。彼が西洋の長所として想定する「組織」においては、各人が憲法や選挙制度のもと政治の担い手として一人一人に主体性が確保されるが、それは中国の伝統精神である「尚賢尊師」の精神と衝突する可能性があるということだ（梁 1937, 282-283）。「尚賢尊師」とは理性に優れた賢人を尚び（尊び）師を敬うことである。理性の尊重とは、自律による倫理関係の維持に加え、理性を備えた賢人に正しく尊敬の眼を向けるということも含む。ここでは賢人の裏返しとしての愚民という暗黙の前提が存在し、全ての個人に公平に権利を認める発想との違いが生じてくるのである。

梁は続いて、各人に権利を認める民主的精神と尚賢尊師の精神との衝突という問題に関しては、人々が人生の目標を欲望の満足とするのではなく、「向上」に据えることで解決できると説く。民主的精神に基づけば、民衆の欲望を最大化する観点から多数決制が望ましい意思決定手段となる。しかし、「人生向上」を目指すならば、自分は他人に及ばないと考えることで常に人に教えを乞う尚賢尊師の精神が前提となり、それであれば当然少数指導の道へと（強制力を働かせることなく）向かうことになるらしい（梁 1937, 282-283）。「人生向上」の人生態度について、梁は次のように述べている。

人生の快樂は生活そのものにある。活動自体にあるのであって外から享受するものにあるわけではない。（中略）外に対して楽を探す必要はない。およそ人が力を内に蓄

えて、何かの活動を通してその力を発揮できれば、その人の一生は伸びやかで楽しいものとなり、それこそが合理である。(梁 1922, 694)

この人生観の裏には孔子賛美があり、『東西文化及其哲学』で梁が中国文化の底流をなすものとして論じる「内に向かって尽くす」態度がある(梁 1921, 464)。すなわち、「外」に流されないという意味での「絶対の楽」を説く孔子の賛美に梁の人生観形成の契機があるということである(湯本 2003, 48-49)。その人生観に適うのが倫理本位社会と言え、日々の生活に楽しみを見出し、人々と円満な生活を送るイメージである。人生や日々の生活の外に目的を置くのではなく、理性の修養を通じて、自分自身や自分を取り巻く人間関係に内在的な「楽」を見出す「目的なき向上奮闘」(梁 1923, 763)こそが人生の意義であると言う。また、理性の涵養は突き詰めるほど自らの理性の欠如を反省し、賢人の教えを乞う姿勢が自然となり、「人生向上」は少数指導へと向かうものと整理される。梁は次のように述べる。

今の中国人が、もし人生向上の精神を恢復できなければ、もうそれ以上にはどうしようもなくなってしまう。しかしながらこの精神に基づけば、当然私が先程挙げた飯団(食料に関する問題を扱う団体—筆者注)における方法(多数決による決定)を取ることはできず、教を以って政を統べ、人生向上の精神を以って生活を包含するということになる。(梁 1937, 284)

個人の権利を主張し、自らの欲望を満たそうと外に向かって求める姿勢を基本とする多数決制は、「人生向上」の精神とは相いれないようである。

そもそも中国の伝統精神と西洋の長所の融合という理念を掲げていたが、実のところ西洋の長所として取り入れようと画策したのは形式としての組織くらいであった。組織を設置するとして、その中で作用し、かつ組織を成り立たせる制度や精神という面に関しては、西洋の長所を持ち込むべきと認識していない。実質的に『鄉村建設理論』で梁が示そうとしたことは、中国の伝統的精神が西洋の長所をどのように満たすのかという点であった。

Ⅲ. 中国共産党の大衆動員と梁漱溟

梁漱溟は、1950年の東北・華北のいくつかの共産党支配地域への視察と1951年の西南における土地改革へと参加した。共産党の大衆動員の実態に触れた経験ともいえるこのイベントを通じて、梁が共産党や中国社会をどのように認識したのかという点について、鄉村建設期の思想も念頭に置きながら分析し、建国初期の梁の姿を明確にしたい。

1. 梁漱溟と「建国初期」

(1) 建国初期共産党の土地改革

大衆動員の一般的な説明の一つとして、梁漱溟は次のようなことを想定する。主に地主などの農村の封建勢力に搾取される小作農などの一般農民を中心とする大衆の不満や生活苦を、農村単位で共有させる。それを通じて、不満や生活苦を、我々の階級と彼らの階級というように対立関係にある階級認識として変換させ、自分たちの手で封建勢力からの土地の再分配を成功させる。そして共産党による指導の下の統治という時代性を大衆に認識させ、大衆は自ら共産党の「動員」を受け入れて、党の統治を支える担い手となっていく。梁にとって大衆動員が行われた最たる例が「土地改革」である⁽⁴⁾。土地改革を通じて梁は「建国初期」を実感し、共産党による国家統治に思惟を巡らせたのである。

簡略化して言えば、実際の土地改革は次のような過程をたどった(田原 1999)⁽⁵⁾。共産党で組織された土地改革工作隊が農村へと入り、貧農を探し出して味方につける。農民と寝食を共にし、信頼関係を築く。村民集会を頻繁に開き、農民の苦しみを吐き出させ、地主への怒りを煽る。そして工作隊が請け負うのではなく、貧雇農層の農民たちによる地主の打倒という体裁を保って、土地の分配、抵抗する地主たちの打倒が展開される。土地改革に相前後する一連の大衆動員を通じ、抜擢された貧農らを中心に、新しい農村部の基層政権として農民協会が組織され、後の郷・村レベル政権の基礎となった⁽⁶⁾。

土地改革運動は、共産党外の知識人を思想的に同化する手段として利用された側面もある(田原 1999, 67-69)。建国初期の中央政府には多様な社会背景のエリートが参加していたが、実際には共産党が実権を保持しながらも、独裁色を回避し一般社会に党外勢力の尊重をアピールする側面があったと指摘されている(久保 2011, 45-46)。こうした建国初期の党中央の多様性は、結果として党外人士の「思想改造」⁽⁷⁾が前提とされ、実際に土地改革を経験した知識人の中にはその暴力的な性格に不快感を示す者もいたにせよ、正面から土地改革政策を批判することは難しい状況だった。

(2) 華北・東北地域への視察、西南土地改革への参加が梁漱溟に与えた影響

梁はいくつかの論稿で、冒頭に掲げた建国初期の2つの経験が自身の思想に与えた影響の大きさについて語っている。例えば、梁の「思想改造」として知られる文章において1950年の東北・華北視察と1951年の四川省東部合川県雲門郷の土地改革への参加が、重要な契機となったことを明記している(梁 1951c, 873)。また、梁が土地改革に参加した後の草稿の欄外には「土地改革運動に対する理解は私の解放後の知識見聞の中でも一大進歩である」⁽⁸⁾と記されている。これには1981年の印が押されており、晩年にも土地改革の経験を重視していたことは注目に値する。

前述の通り土地改革直後くらいから思想統制が強まり、毛沢東の梁に対する接し方も厳しくなる中で(河田 1989)、自由な表現が困難になった。梁は「思想改造」文で共産党の方

針への理解を示したが、毛は認めず、1953年以降あからさまに梁漱溟批判を展開していった。ここで着目したいのは梁が共産党を肯定的に記述する際の、その肯定の仕方である。梁が晩年においても土地改革及び階級闘争の重要性を認めている事実に加え、一部共産党の理念から外れた形で党の政策を評価する記述的な複雑さを包含している点で梁の文章は興味深い。

2. 梁漱溟が経験した現場

(1) 1950年、東北・華北地域への参観

冒頭で述べた梁の2つの経験について、まずは彼の行動と農村の状況を確認したい。梁の東北・華北地域への視察状況を把握するためには、日記(梁 1950)と彼の側近が編集した『梁漱溟年譜』(李・閻 2018)、の2つを参照することができる。日記によると、梁らは4月から山東省、5月末頃から当時の河南省と平原省⁹⁾、6月に一度北京に戻ったのち、7月から再び河南省、7月下旬をまた北京で過ごし、8月から東北地域への視察を行った。視察地域は共産党統治が比較的早い時期から確立していた地域で、それらは解放区と呼ばれた。

日記からは繊維産業、製鉄の工場や指導的地位にある要人との会談に多くの時間を費やしていたことがわかる。また、何らかの施設や農村を参観する前には、ほとんどの場合、要人との会談を経ている。例えば1950年7月6日に、河南省主席呉芝圃と話して参観の計画を決めた旨が記述されているように、参観する場所や施設は地方都市の政府要人らの意向を反映してスケジュールされていたこともわかる。農業上の各問題、抗戦期以来の経緯、民衆動員の方法など、大衆動員と関連性の高い言葉で表現される内容の話は、専ら地方政府や協同組合の要人、工場長などで行われ、そうした記載が労働者や農民との直接的な会話よりも多く記載されていたことから、梁自身もこの参観を共産党の取り組みに関する「学習」であると認識していた可能性が高い。

(2) 1951年、西南の土地改革への参加

梁によると、彼は1951年の5月から8月にかけて四川省川東区合川県雲門郷に入って土地改革工作団に参加した。ここで西南土地改革における梁の足跡を辿るには、やはり日記と西南土地改革工作団の報告書(以下、『報告書』と表記)¹⁰⁾を用いる。『報告書』によると、当該地域への工作隊「西南土地改革工作団第一団川東隊」は、雲門郷を含む合川県第四区で活動を行った。川東隊は26人で構成され、4つの隊(川北隊～川東隊)では平均年齢が最も高い52歳であり、民主党派、政府関係者、文化芸術関係者など様々な人が参加していた(『報告書』1-2)。

川東隊は6月14日に雲門郷と天星郷に到着し、8月17日の勝利大会までの約2か月間作業を行った。この土地改革は計画では7月18日までに終わる予定だったが、結果的に8

月 17 日まで延長された⁽¹¹⁾。『報告書』に記載のある本来の計画と日記とを比べることで、階級区分の特定、土地の評価、分配方法といった段階で遅延が発生していたことがわかる。

また、梁は雲門郷の闘争大会（6 月 30 日）の現場を見学していたこともわかる（梁 1951e, 455）。日記では詳細な記述がないものの、「義憤に満ちた」貧雇農たちによる地主階級の吊し上げの現場を見ていたと考えられる。後にも触れるが、梁は土地改革後の毛沢東との会談で、追い詰められた地主が自殺してしまうことを問題視していた（汪 2004, 149）。土地を没収し感情的に地主を追い詰めていく大衆動員の負の側面を目撃していたと考えられる。次に、これら東北・華北地域参観と西南土地改革参加を経て発表された文章を検討する。

3. 梁漱溟の論稿

(1) 梁漱溟の「思想改造」

i. 階級観

上述したように、梁は中国社会を階級対立的に見ることに同意しない。しかし、土地改革の理念は、農村の階級対立を前提とし、搾取にあえぐ農民による地主の打倒によって革命がなされるというものであった。農民をも含む労働者階級を「領導」する前衛たる共産党にとって、「新中国」建国のための階級闘争には当然階級の存在が不可欠だった。梁は「思想改造」の文章で次のように述べる。

共産党が成功したのは、私が同意しかねたまさにその点、つまり、階級的な眼で中国社会を観察し、階級闘争で中国問題を解決したからである。私は、いま中国社会には階級が欠けている事実がありながら、階級的な観点に立ってそれを把握してこそ、方針が立つことに気が付いた。（梁 1951c, 876）

階級は現実にはないが階級的な観点に立った階級闘争を行うことで「中国問題」を解決してきたと言う。階級の欠如という認識は変えずして階級闘争を肯定している。共産党との思想的衝突を避け、政治的に排除されることを防ごうとするならば、中国社会に事実として階級が存在することも認め「思想改造」として表現すれば良い、ということだ。梁は、中華人民共和国建国後も大陸に残り政府との関わりを保ち続けた。そうしながらもこのような微妙な表現を選択したところには、注目すべきであろう。梁は、ただ平和的に土地を分配するだけではなく、人間関係の変化を求めるという文脈から武装闘争、階級闘争を肯定し、土地改革に必要な条件について次のように述べる。

社会の不平等な関係、他人への隷属あるいはそれに近いものを消去する。「站起来（立ち上がる）」は目的であって手段ではない。「站起来」は闘争を経る必要があるだろう⁽¹²⁾。

ここにおいても階級の存在を前提とした階級闘争の必然性、あるいは武装闘争を経ることによる潜在的な階級関係の露出といった内容には触れられていない。それよりも目的としての「站起来」を強調するように、一般農民が不満のある現状に対して自ら立ち向かうように意識を変化させることに闘争の価値を見出そうとしている。そもそも「站起来」という言葉自体に、地主階級に搾取され経済的・精神的に困窮した農民が、共産党の政策による啓発を経て潜在的不満を噴出させ、「立ち上がる」という、階級的視座に立つ文脈がある。この文脈にもかかわらず、階級的要素をもって農村状況を説明しようとはせず、階級の存否とは切り離し、土地改革や階級闘争のみを評価しようとするのが梁の語りの特徴である。階級の存在を認めない語りは他にも見られる。梁は東北参観時に、日中戦争以降の闘争の過程について話を聞き、自らの誤りを認識するに至ったと記した(梁 1951c, 880)。日中戦争の勃発に際して日本軍が農村にも侵入して中国軍が撤退し、抗戦が困難な状況になると、資産を抱える地主や郷紳は進んで日本軍に投降し、貧農だけが八路軍や共産党の指導の下に団結して闘い続けたということである。抗日戦争の中で人々が階級を意識する過程である。梁はこの経緯について次のように解釈した。

これら北方の農村には中世ヨーロッパのような両面に対立した階級はないが、貧富の差はすでにあるので、機会が訪れれば両面に分かれて相闘うことになる可能性があった。私はこれまでその静態ばかり見ていて、このような発展の可能性には思い及ばなかった。(梁 1951c, 880)

抗日戦争という外的要因によってはじめて階級が出現するという説明は階級の欠如が前提となっている。また、ここで静態という言葉に注目すれば、中国の農村を観察する際に動的な観点も必要だったということになる。中国社会における階級の存否という固定的な見方ではなく、環境の変化によって階級対立が鮮明化する可能性を見落としていたと言うのである。階級対立という状況が人々の認識に影響されながら流動性を帯びて出現する可能性に言及したものと言える。階級対立的状況は中国社会の特徴から自然と起こるものではなく、そのような状況が出現することもあると認めたと過ぎない。

ii. 農民観

1981年時点でも梁は「土地改革工作中にはいくつか小さな間違いがあり、望ましくない振舞いもあったとはいえ、共産党の着眼点が土地の分配ではなく、農民を奮い立たせ頭を上げさせることにあったと理解させてくれた点で非常に意義深かった」⁽¹³⁾と考えていたようである。それでは政策の対象となる農民について梁はどのように捉えていたのか。

かつて私が殊に恨めしかったのは公共事や国家のことに興味がなく、散漫で消極的で各自がただ日々を過ごし、自分に関係ないことは気にかけないようなことである。老解放区の人々は、教育水準は高くないが政治意識や組織力は強い。自分たちの問題は常に自分たちで解決しようとしている。(梁 1951a, 868)

つまり、梁には、団体生活の欠如を理由として、農民は組織の一員としての責任感や自発的に組織運営し問題を解決しようとする意識などを持ちえない、という農民観が強く存在したと見ることができる。そうした彼の認識は、自身の郷村建設の実践とも無関係ではなかった。梁は、彼の団体生活や郷村発展の在り方、持つべき精神といった理想が周囲に理解されずに苦悩していた⁽¹⁴⁾。これに対して毛沢東は、農民に動的な性格を見出し、啓発を通じて潜在的な不満を共通認識として噴出させ、階級認識へと変換させることで、国家建設の担い手となる可能性を信じた。こうした農民観の相違は、梁と毛の論争の中で度々取り上げられた。その中で、梁の農民観は変わっていき、組織形成のための農民への「教育」という文脈で階級闘争を肯定していくに至る。

私が今日見たものは、指導があり計画があり秩序がある闘争で、一種の教育である。(中略) 土地改革の最大の影響は政治面では政権を安定させ、軍事面では志願兵を増やし、経済面では組織化し協力することを便利にし、文化面では教育を容易に発達させられるようになったことである。(梁 1951a, 868-869)

梁は、「教育」としての闘争を肯定した⁽¹⁵⁾。「教育」の意義とは農民を「立ち上げ」らせ、指導者と農民の結合を実現することによって(梁 1951c, 889)、組織化を成功させることにあった。山東を参観したときも「農民や労働者の意気込みは十分で、皆奮い立っているのを目の当たりにした」(李・閻 2018, 246)と述べていた。つまり農民たちが「積極性」「主体性」を保持しながら、組織を形成させている点に階級闘争の意義を見出していることがわかる。「組織化」は、梁が西洋の長所として中国社会に必要と強く意識していたものだった。

(2) 後年における梁漱溟の発言

ここまで建国初期の梁の語り口を検討してきたが、毛沢東死後の異なる学術・思想状況における、梁の発言や文章も簡潔に確認しておく。後年の梁は「新中国」建設のリーダーとしての毛に敬意を示す一方(艾ほか 2011, 146)、晩年の毛に対しては痛烈な批判を加えた(梁 1982, 521)。

梁は、土地改革期の毛を「はっきりと自分の意見というものを持っていた」(梁 1982, 521)と評している。梁の中国社会観と相反するものとしつつも、ある時局に対処する一つの方

法として階級闘争に一定の理解を示していた。また、梁は「旧中国」の特殊性を強調し、階級観は中国に当てはまらないとしたが、毛は一般性を強調し中国にも階級理論は当てはまるとして闘争路線を選択した。これについて後年の梁は「旧中国社会はその特殊性の側面だけでなく、別に一般性の側面も持ち」、毛が「一般性という側面をしっかりと掴んだ」ので政権樹立に成功したと述べる(梁 1977, 427)。梁は中国伝統の精神、文化といった特殊性を過信してきたことに対して反省し、自身が具体的な国家建設の構想を持ち合わせていないと自らも認識していた(河田 1989, 163-164)。このことから階級闘争を無条件に否定することはできなかったのだろう。

ただし、中国社会における一般性の側面が、時間や空間を超越したものとは言っていない。梁は晩年の毛の路線に無理が生じていたことを念頭に、一旦中国社会の本質(特殊性)が現れると、一党支配を軸とする政治局面はその根拠を失うと認識していた(梁 1977, 427-428)。梁は後年に、「私は中共が変わることをずっと望んでいました。だから一旦は中共の指導する抗日戦争や国内闘争を見ていました」(汪 2004, 155-156)と述べている。基本的には共産党の路線に反対で、党外に身を置くうちに階級闘争を通じた共産党政権の樹立に直面することになった。共産党による統治は一時的な現象という認識を持ちながらも安定した政権の樹立を望んでいたため、階級闘争の有効性を認めながらも、自らの観察する中国社会の特徴に不適切な、階級にこだわる共産党の統治方針には常に懐疑的だったと言えるだろう。

IV. 郷村建設期と建国初期の梁漱溟

IIIでは梁漱溟が建国初期に中国共産党の大衆動員に触れた2つの経験を通じて得た階級闘争の有効性や限界についての認識や語り方を検討した。その有効性と限界に対する梁の認識の裏にどのような背景があるのか。この点を、IIで確認した郷村建設期との通時的な比較から検討することが本節の狙いである。

1. 「階級闘争の有効性」の認識

梁の、階級闘争並びに土地改革の肯定は、階級社会に適った処方箋としての意味とは切り離して、国家建設のための有効性を持ち出していたことは既に確認した。梁は自らの農民観を裏切られる形で、農民の潜在的な感情や意思を引き出すことで彼らの組織化を達成し、そうした「積極性」を持つに至った農民によって支えられた安定政権の確立につながるという文脈で、階級闘争の有効性を説明していたことが分かった。

しかし、これに対して自然に次のような疑問が浮かび上がる。政策的に村の区画を設定し、その中で地主対貧雇農という階級対立を見出し敵対心を煽ることは、実際には共産党が恣意的に農民をコントロールし洗脳する側面もある。それについて梁はどう認識してい

たのか。結論としては共産党の「動員」に対して梁が苦言を呈すような発言は管見の限り見つからず、既に確認したように土地改革など階級闘争を通じた農民の啓発について、梁は「教育」という表現を多用し、地主に立ち向かい共産党の指導に積極的に参加する農民あるいはそれを受け入れる農民を「主体性」ある存在として表した（梁 1951a, 868-869）。明らかに階級闘争の指導力や「教育」を介した啓発力といった側面を、梁は肯定的に記述してきた。

こうした側面を評価しようとする背景は、梁の農民観に含まれる深い嘆きと無関係とは思えない。そもそも農民は「公共事や国家のことに興味がなく、散漫で消極的で各自がただ日々を過ごし、自分に関係ないことは気かけない」と論じる（梁 1951a, 868）。この認識は、『郷村建設理論』において倫理本位社会を提示する際の集団生活の欠如という根拠になっていただけではなく、郷村建設を実践する中で「教育」を受ける農民が持っていたとされる精神であった。しかし、その精神を涵養するには期待外れの状況だった⁽⁶⁾。当時の郷村建設の様子について知る方法は他にもある。

1936年5月21日の様子について、全国各地からの文章を集めて作家の茅盾が編集した『中国の一日』には「田舎の小学教師の生活の一頁」と題した、郷村建設運動の一環で村の事務を執り行う小学校教師の文章が掲載されている（茅 1984, 96-100）。町で火事が発生しても多くの住民はただ傍観するか自分の家の心配をするだけであったし、ある時は懇談会を開催し小学校設置について提案しても誰も責任を持つとしなかった。形式的に組織を作ったとしても、団体行動の意義は農民に理解されなかった。そうした現実を憂う感情と、実際に農民を突き動かした階級闘争を称揚する語りは表裏をなすと考えられるだろう。そしてこの表裏をつなぐ補助線として溝口氏が指摘する梁の「賢人治」（溝口 1996）の志向が挙げられる。

その志向は梁の言葉では「尚賢尊師」を重んじる価値観ということになるだろう。つまり、徳や理性のある人を敬い、主体性を持ってその有徳者の指導の下に奮闘する精神のことである。ここで注目すべきは主体性という言葉である。階級闘争の文脈で語られた農民の主体性と、『郷村建設理論』において述べていた「尚賢尊師」の下の主体性の間には明らかに類似性を見出すことができる。それは、自らの意見を反映させる権利が確保されていない状況の下、物事を判断できる人の指導方針と自らの意欲の方向を合致させ、「積極的」に指導を受け入れていく態度を指す点で共通していると言える。「尚賢尊師」の理想と主体性の理解は、農民観や国を憂う知識人的語りと相まって、階級闘争のみを切り取って肯定する表現につながっていると理解できる。

2. 「階級闘争の限界」の認識

階級の欠如という中国社会の特殊性を無視した方法には、長期的に見て無理が生じるという説明から、階級闘争の限界を梁が認識していたことは既に確認したが、そのほかに、

階級闘争の限界について、もう1つの文脈があった。それは暴力への反対である。梁は、理性的な中国人の性格を称揚したバートランド・ラッセルの文章に触れたうえで、次のように述べた。

儒家の礼楽運動は完全には成功していないが(中略)かなりの成果は収めた。一つには中国人の平和的精神を育て上げ、また民族生命を今日まで持ちこたえさせた。中国人が平和を愛することは世界にあまねく知れ渡っている。(中略)暴力を恥じ勇気をもって善に服す度量の大きさはまさに礼俗の涵養から生まれる理性に他ならない。(梁 1937, 184-185)

礼俗の実践により衝突を避け倫理本位社会を築いてきた誇り高き中国民族、という認識を持つ梁が、共産党の階級闘争の暴力的側面を放っておくわけがない。後年のインタビューで梁は、1951年9月3日の夜に行った毛沢東との会談を振り返っている。四川の土地改革に参加したことについて毛から感想を求められた梁は次のように答えたそうだ。

例えば政策の規定では地主の殴打を禁止していますが、私は闘争大会でひどい暴行を目にしました。ある夫婦はひどい暴行に耐えきれず入水自殺しました。これは注意すべき問題です。さもなくば地主は生きる道を見出せず、反抗か自殺かするしかないということになってしまいます。(注 2004, 149)

ここに土地改革の経験から、暴力に対する率直な感想が表れていると言えるだろう。先ほど中国文化や儒教における理性を重視していたことに触れたが、平和主義へとつながる傾向は儒家への転身以前から見られた。当時の梁は、財産の私有制に基づく自由経済が競争を生み、人間の尊厳を失わせているという認識を得ていた。彼はそうした経済競争のために余儀なくされる強盗について次のように述べる。

騙され被害にあった者も、もとより不幸であり憐れむべきだが加害者も余りに憐れである。とても「人」とは言えない。人間はこうではいけない。人間のあらゆる罪悪は制度(財産の私有制)が引き起こしている(後略)。(梁 1974, 689)

そして、湯本の説明によると「生」を肯定する孔子との出会いを通じて、人を人たらしめる理想の姿として、Ⅱで確認した「人生向上」という考え方を得たという(湯本 2003, 48-49)。そのため梁の社会主義とは、強者に搾取される弱者の救済といった階級対立的視座に立ったものではない。否応なくモノやカネへの欲望を増幅させられ、追求させられることで、彼にとって理想の人生向上の精神を実現不可能なものにするという観点から、自

由主義競争を批判するものであった。生存競争の中で欲望のための人生に引き込まれる強者の側に対しても憐みの眼が向けられたのである。

こうした梁の考え方に即してもう一度土地改革を考えるとどうなるのか。地主も小作人も同じ経済制度の下で生き抜くための人生を送っている。貧雇農層が経済的に困窮し最低限の生活しか送れない事態も、地主が小作人から搾り取ろうとするその態度も、共に欲望の餌食であり、貧雇農、地主のどちらも経済制度の犠牲者として捉えられるはずである。地主が地主階級たる所以も人生向上の精神の観点からは憐みの対象であり、自殺という結末に苦言を呈したと理解することもできる。必要以上に対立状況を強調し、争うことは問題の捉え方からして梁の考え方にそぐわなかった。また、人生向上の発想には、外に対して自らの欲望を満たすものを求めるのではなく、内に対して自省を追求し、良好な人間関係の構築を通じて人生そのものを楽しむ、という中国的理想が窺える。その裏には、対象を変化させ欲望を満たさんとする西洋文化（梁 1921, 381-382）との比較の中で中国文化をいかに評価していくかという思考が常に存在していた。人間に普遍的な価値観を追求する姿勢と民族主義的思考が融合した思想ゆえに、梁は階級観を遠ざけていたとも言える。

V. むすびにかえて——梁漱溟の語り

「尚賢尊師」の志向や「人生向上」という概念の背景には、望ましい人間関係を維持し、自らの人生そのものを目的として設定し楽しむことができる精神を養うという人間や、そのような人間によって構成される社会のあり方が理想として共通に描かれている。そして、そのために「理性」を涵養しなければならないという固定化された理念が確かに存在していた。こうした梁の描く理想に立てば、相反するように見える階級闘争の有効性と限界の認識を理解することができるかもしれない。そして梁漱溟の思索の背景には、中国文化の特殊性の認識と普遍的価値の追求という相克が潜んでいたと見ることもできる。具体的には、一見普遍性を帯びた「人間らしい生活」の志向は、孔子の唱える「絶対の楽」の信奉という中国文化の特殊性の観点からの語りにも支えられていた。また、組織化という西洋の長所を取り入れる必要性に迫られる中で、「尚賢尊師」という中国文化の特殊性は、「主体性」に関する解釈を通して、普遍的価値を追求する語りへと変換されてきた側面もあるだろう。

以上、本稿は中国社会の階級欠如という認識や暴力への反対は譲らずとも、賢人指導の下の農民の主体性に関する理解の点で階級闘争を認める梁漱溟の語りが存在し、梁の適切な評価方法を探ること自体が当代中国のはらむ時代的複雑性を解明する糸口になる可能性を提示するものである。

注

- (1) 「建国」という語彙の選択が中国・台湾の国家観に対するスタンスにつながることから、一義的には中立的な「成立」という用語を用いることとしている。ただし、そのような厄介な問題を置いておくとすれば、本稿で扱う人物にとって 20 世紀半ばは間違いなく国家建設の時代であり、「建国」の物語の中に置かれていた対象を分析するものである点を補足しておく。
- (2) 中国における自由主義思想は清末の登場以降、少なくとも 1930 年代には各界で認知され、特に日中戦争終結 (1945 年) から人民共和国成立 (1949 年) までの国共内戦期に活発な議論がなされていた。そうした自由主義思想を標榜する政治団体の一つとして中国民主同盟が位置づけられる (中村 2018, 78-79)。中村 (2018) においては、新民主主義段階における共産党の民主集中制を、人民の論理に基づいて算出された原則を基盤とする複数性を担保した概念として捉えることにより民国期以来の自由主義思想の系譜を保存しようと試みた人物として銭端升を解釈している。本稿では取り上げることがかなわないながら、そうした自由主義思想の系譜を主とした「近代」の構想も念頭に置く必要がある。
- (3) 梁は「組織」の具体的イメージを協同組合に求めている (梁 1937, 282)。
- (4) 土地改革の影響は限定的だったとする見方もある (久保 2011, 26-27)。
- (5) 梁漱溟が参加した土地改革においてもこのような手順を踏んでいたか、また梁がどのように土地改革プロセスを認識していたかについて詳細は明確ではないが、少なくとも梁の日記には貧雇農との会議や「査田」を通じて土地の再分配を進めていく過程が記載されている (梁 1951e)。
- (6) こうした土地改革は実際に経験した日本人による体験談が出版されており、秋山 (1977)、福地 (1954) に詳しい。
- (7) 補って言えば、「共産党の建国の論理から外れた思想」を「党の方針と合致するように改造」するということであり、「思想改造」の是非は共産党に委ねられる。したがって「思想改造」の是非のみを問うことは共産党目線の議論に過ぎない。
- (8) 梁 (1951a, 869)。1981 年に梁は、西南土地改革参加から得た認識の重要性を改めて記している (梁 1951b, 867)。
- (9) 中華民国末期に共産党が革命根拠地として設置した省。1952 年に山東省と河南省に編入され廃止された。
- (10) 中国人民政治協商会議全国委員会・参加と参観三大運動準備委員会編 (1951)。価値観を含む表現が多く全てを事実として受け取ることはできないが梁の文章を検討する際の参考となる。
- (11) 報告書に記載のある本来の計画と日記とを比べることで、土地の評価 (査田)、土地分配 (分田)、組織運営の方針策定といった段階で遅延が発生していたことがわかる。『報告書』によれば 7 月 11 日までに査田を完了させる予定だったが、日記から 19 日まで遅延していたことがわかり (梁 1951e, 456)、土地改革の計画を 8 月 17 日まで 1 か月ほど延長し、その間に分田、組織運営方針の整理といった作業時間に充てられている。
- (12) 梁 (1951a, 868)。この文章は西南の土地改革に参加する 1951 年 5 月以前に書かれており、前年の東北・華北地域への参観を受けての見解と認識すべきである。
- (13) 梁 (1951b)。「参加西南土改時的一篇發言草稿」の欄外に付録として 1981 年に梁が記述した文章が載せられている。

- (14) 小林 (1998, 135-136) では馬 (1994, 242) を引用し、梁の側近である郷村建設の指導者も問題解決方法を聞いていないので一連の実験計画を出せないと述べていたことから、部下にも梁の考え方が伝わっていない可能性を指摘している。
- (15) 同時代の知識人の「思想改造」の文章において「教育」と言えば、「自己教育」の文脈で使われることが多い。費孝通などの知識人は、ブルジョア階級を脱し、農民大衆の思考に近づくために徹底的に自分自身を教育してきたことを表明した。
- (16) III-3-(1)-ii 参照。

参考文献

(日本語文献)

- 秋山良照 (1977) 『中国土地改革体験記』中央公論社。
- 小野川秀美 (1948) 「梁漱溟に於ける郷村建設理論の成立」『人文科学』第2巻第2号, 20-57。
- 河田悌一 (1989) 「伝統から近代への模索——梁漱溟と毛沢東」(小島晋治編『岩波講座現代中国 第4巻——歴史と近代化』岩波書店), 139-176。
- 久保亨 (2011) 『シリーズ中国近現代史④——社会主義への挑戦』岩波書店。
- 小林善文 (1998) 「郷村建設運動における梁漱溟の道」『史林』第81巻第2号, 1998年3月, 110-140。
- 砂山幸雄 (2014) 「梁漱溟と毛沢東——反近代の夢のゆくえ」(趙景達・原田敬一・村田雄二郎・安田常雄編『講座 東アジアの知識人 第5巻』有志舎), 300-316。
- 田原史起 (1999) 『現代中国農村における権力と支配』アジア政経学会。
- 中村元哉 (2018) 「第3章 中国憲政とハンス・ケルゼン——法治をめぐる」(中村元哉編『憲政から見た現代中国』東京大学出版会), 75-98。
- 福地いま (1954) 『私は中国の地主だった——土地改革の体験』岩波書店。
- 茅盾編, 中島長文編訳 (1984) 『中国の一日』平凡社。
- 溝口雄三 (1996) 「もう一つの「五・四」」『思想』第870号, 1996年12月, 53-76。
- 湯本國徳 (2003) 「梁漱溟における民衆と「合理的生活態度」」『千葉大学法学論集』第18巻第1号, 2003年7月, 33-39。

(英語文献)

- Alitto, Guy S. (1979) *The Last Confucian, Liang Shu-ming and the Chinese Dilemma of Modernity*; Berkeley: University of California Press.

(中国語文献)

- 艾凱采訪, 梁漱溟口述, 一耽学堂整理 (2011) 『這個世界会好嗎』天津: 天津教育出版社。
- 李淵庭・閻秉華編著 (2018) 『梁漱溟年譜』北京: 商務印書館。
- 馬勇 (1994) 『梁漱溟教育思想研究』瀋陽: 遼寧教育出版社。
- 鄭大華 (1999) 『梁漱溟學術思想評伝』北京: 北京図書館出版社。
- 汪東林 (2004) 『梁漱溟問答録』武漢: 湖北人民出版社。

中国人民政治協商會議全國委員會，参加与參觀三大運動準備委員會編（1951）『西南土地改革工作團第一團 工作總結報告彙集』西南軍政委員會土地改革委員會。

（梁漱溟全集）

梁漱溟（1921）「東西文化及其哲學」中國文化書院學術委員會編『梁漱溟全集』第1卷，濟南：山東人民出版社，2005年，319-598。以下，『全集』と表記。

- （1922）「合理的人生態度」『全集』第4卷，692-696。
- （1923）「我之人生觀如是」『全集』第4卷，762-764。
- （1930）「中國民族自救運動之最後覺悟」『全集』第5卷，44-118。
- （1935）「村學的做法」『全集』第5卷，722-749。
- （1936）「鄉村建設大意」『全集』第1卷，599-720。
- （1937）「鄉村建設理論」『全集』第2卷，141-203。
- （1950）「日記」『全集』第8卷，426-444。
- （1951a）「參加土改時一次發言草稿」『全集』第6卷，868-869。
- （1951b）「參加西南土改時的一篇發言草稿」『全集』第6卷，864-867。
- （1951c）「兩年來我有了哪些轉變？」『全集』第6卷，873-890。
- （1951d）「信從中國共產黨的領導並改造自己——在人民政治協一屆全國委員會三次會議的發言」『全集』第6卷，891-892。
- （1951e）「日記」『全集』第8卷，445-466。
- （1974）「我的自學小史」『全集』第2卷，659-699。
- （1977）「我致力鄉村運動的回憶和反省」『全集』第7卷，424-428。
- （1982）「試說明毛澤東晚年許多過錯的根源」『全集』第7卷，520-521。